

令和2年度

年報

2020

横浜国立大学
地域連携推進機構
成長戦略教育研究センター

令和2年度

年報

Contents

I. 起業家型人材育成・教育	- 2 -
1. 学部生へのキャリア教育	- 3 -
(1) アントレプレナー入門	- 3 -
(2) 経営者の役割と従業員の役割	- 5 -
(3) 実践新商品企画	- 6 -
(4) 研究開発論	- 7 -
(5) アートマネジメント	- 10 -
(6) 海と地域のつながりと活性化	- 12 -
2. 大学院博士課程前期学生へのベンチャー教育（副専攻プログラム）	- 13 -
(1) イノベーションと課題発見Ⅰ	- 13 -
(2) イノベーションと課題発見Ⅱ	- 15 -
(3) 神奈川県を取り組む技術課題	- 17 -
3. 学内連携による企業成長戦略教育	- 19 -
(1) 実践企業成長戦略Ⅰ（国際社会科学府経営学専攻）	- 19 -
II. ドクターキャリア開発施策	- 20 -
III. その他の外部連携活動	- 23 -
1. シュタインバイス大学日本研修	- 23 -

横浜国立大学 地域連携推進機構
成長戦略教育研究センター

I. 起業家型人材育成・教育

当センター・ベンチャービジネスユニット（略称 VBL）の二本柱の一つである起業家型人材の育成を目標に、学部や大学院での教育を行ってきた。学部教育においては、平成 29 年度（2017 年度）から学部教育改革と連動して全学教育システム改革が実施され、高大接続・全学教育推進センターによる全学教育強化という方針の中で、当センターでも実務経験を持つ教員が中心となって前年度より開講科目を増やし、科目の充実を図った。特に当センターの役割として、将来のキャリアを幅広く意識し、視野の広い人材を育てるという観点から、まずは『アントレプレナー入門』により起業を意識する人材教育を、そして企業の中で経営的観点を持って活躍する人材育成のための『経営者の役割と従業員の役割』、また企業内でのクリエイティブな活動によりイノベーションにつなげるような人材教育のための『実践新商品企画』、芸術のマネジメントという観点から芸術と社会を結びつける『アートマネジメント』、そして、理系人材が将来について考える助けとなるよう研究開発を職業として捉え、社会への還元を意識させる『研究開発論』を開講してきた。これらの科目に加え、今年度は地域のうちでも特に神奈川県「海」に着目して『海と地域のつながりと活性化』を新たに開講した。

そして、より専門性の高い大学院教育においては、理工系の大学院生を中心に、将来イノベーション創出に貢献できる人材の教育として、起業家人材養成教育プログラム（副専攻プログラム「ベンチャービジネス」）を提供した。具体的には、社会の仕組みを知り、イノベーションや起業について考える機会を与える『イノベーションと課題発見Ⅰ』と、その次のステップとして、自らの研究シーズをビジネスに結び付けて考えさせる『イノベーションと課題発見Ⅱ』を開講し、さらにその先のステップとして、『イノベーションと起業Ⅱ（ベンチャーインターンシップ）』で、実際に社会の中で自身の研究テーマの位置づけを知り、それに基づいたイノベーションの可能性を考える教育を行った。加えて、自分たちが関わる理工系の研究テーマが社会の中でどのように役立っているのか、また社会の課題を解決する手段としてどのような研究が行われているのかを身近な事例から知る『神奈川県の取り組む技術課題』により、別の視点から社会における研究の位置づけを考える教育を行った。

1. 学部生へのキャリア教育

(1)アントレプレナー入門

「アントレプレナー入門」 春学期開講 火曜 4 時限、履修者 53 名

【履修者のプロフィール】

	教育学部	経済学部	経営学部	理工学部	都市科学部	計
1 年生	3	0	23	13	6	45
2 年生	0	1	1	5	0	7
3 年生	0	0	0	1	0	1
4 年生	0	0	0	0	0	0
計	3	1	24	19	6	53

本講義は、成長戦略教育研究センター（ベンチャービジネスユニット）のミッションである起業家型人材育成のための体系的教育の一環として、全学部生を対象に全学教育科目として開講している。単に講義を聴くだけの受け身の授業ではなく、グループディスカッションやビジネスプランの作成といったグループワークを行う、参加型の授業（アクティブラーニング）を採り入れている。

【講義スケジュール】

No.	テーマ・講師	No.	テーマ・講師
1	オリエンテーション、 起業に関する考え方アンケート	9	新規事業プランニングⅡ(1)ビジネスモデルの作り方
2	アントレプレナーとは？	10	新規事業プランニングⅡ(2)グループ討議
3	ベンチャー起業と経営 (株) ipoca 代表取締役社長 一之瀬 卓氏)	11	新規事業プランニング 中間発表
4	新規事業プランニングⅠ(1)世の中の課題を探そう	12	トレンドとマーケティング (TREND UNION (Edelkoort East(株)) 代表取締役 家安 香氏)
5	新規事業プランニングⅠ(2)課題の掘り下げ	13	新規事業プランニングⅢデザインシンキング
6	課題解決からの起業 (ジョージ・アンド・ショーン合同会社 CEO 井上 憲氏)	14	新規事業プランニング 最終発表
7	新規事業プランニングⅠ(3)ビジネスプランを考えよう	15	まとめと講評、最終アンケート
8	事業経営に必要な知識		

講義の目的は、必ずしも実際に起業を目指す学生だけではなく、企業に就職する場合でも、組織の中で常にビジネスを意識し、経営者の視点で業務を遂行することのできる人材、それによりイノベーションに結び付けることのできる人材育成を目指している。履修者にアンケートを取った結果、起業したいと考える学生が 19%、一度は就職するが将来は独立し

たいと考える学生も合わせると 56%（昨年の 42%から 14 ポイントアップ）に上り、大企業に就職して終身雇用と考える安定志向の学生が必ずしも多くないことを示している。また、講義を受けたことで起業に対する意識を変えた学生が半数近くいたことを特筆すべき結果として記しておく。

(2) 経営者の役割と従業員の役割

秋学期開講 履修者 260名

学部	経済	経営	理工	都市科学	合計
1年	42	101	1	9	153
2年	7	24	39	3	73
3年	2	4	20	2	28
4年	1	1	3	1	6
合計	52	130	63	15	260

この講義は産業人材育成支援を目的に学部生を対象に、企業で実務経験のある教員が開講している。授業は三つの内容で構成され、一つは株式会社の株主、経営者、従業員の役割、及び会社組織についての講義である。会社で働く者の立ち位置を考え確認できる知識を取得することである。一つは実践教育として企業の経営企画、総務、人事、経理分野の業務について具体例を示しながら解説している。雇用契約、人事制度、社会保険制度など会社ですぐに役立つ知識の習得である。一つは外部講師の方にビジネス社会の抱える課題、それへの取り組みについての講義をお願いし、社会性を養うことを目指している。精神科医で産業医の医師に労働環境、特に精神疾患についての現状と課題について、一部上場企業の元 CSV 部長に事業と社会貢献活動の関連について、上場企業の会計監査人を務める公認会計士に企業の情報開示の必要性とその内容の信憑性担保について、中小企業経営者に経営に携わる生の話をしている。この専門家講義に基づき、自ら参考文献を調査し、複数の参考文献から自分の考えを論じたレポート作成は、事実と自分の意見を明確に区別して述べる能力醸成を目指している。

今年度は企業と Zoom で交流会を実施した。経営者や企業担当者と生で意見交換できた事はとても良い経験になったと確信している。

本科目が社会に出るにあたり、社会人として最低限の知識習得、自分の意見を表現できる能力育成の一助になれば幸いである。

【講義スケジュール】

回	テーマ	回	テーマ	回	テーマ
1	オリエンテーション	6	職場環境について 「産業医」講演	11	会社を監督する 「公認会計士」講演
2	仕事の種類と 働き方の多様性	7	企業の社会的責任 「CSR 実務家」講演	12	社会保険制度
3	株式会社の成り立ちと 会社の構成員	8	企業と交流(半数)	13	会社を経営する 「経営者」講演
4	経営者は何をするのか	9	会社の規則(半数)	14	起業する
5	従業員の役割	10	会社の成績表	15	企業を継続させる

(3) 実践新商品企画

本授業では清涼飲料新商品のコンセプト開発を実習することを通じて、B2C商品の開発の手順・手法を習得するとともに、レクチャーと合わせてマーケティングの理論と実際を学ぶことを目的としている。

市場把握・分析／消費者ニーズ・インサイトの探索を起点に、コンセプト・ベネフィットの構築、具体的属性アイデアの創出、消費者調査による受容性の確認、調査結果をうけてのコンセプト・商品案の見直しという一連の商品開発プロセスをグループワークで演習した。自己以外／ターゲットとする消費者のニーズやインサイトの仮説を考え、アイデアを具体化し検証することでマーケティングの視座と思考回路を身につけていく構成としている。学部・学年を超えた24名の学生が受講し、グループワークによるチームビルディングや協働作業を経験すること、仲間とともにモノを作りあげていく楽しさと難しさを体験することも重要な目的としている。本年はオンライン（リアルタイム）授業とせざるを得ず、対面による議論やプレストによってアイデアを精緻化するパフォーマンスは叶わなかったが、学生たちの真摯な取り組みにより、授業の目的は達成できたと考えている。

「創造する力」に加え、「現場観察」「データを基にした思考」「調査に基づく柔軟な修正」「多様な人材との協働」を習得することは起業を目指す学生のみならず、企業・機関や研究機関に従事する者にとっても意義のあるものであり、マーケティングのマインドとスキルを通じイノベーションを創出する人材になることを期待している。

【授業スケジュール】（全学教養教育科目／秋学期／月曜日3限）

第1回	10月5日	オリエンテーション
第2回	10月12日	市場分析からの機会発見
第3回	10月19日	カテゴリーの探索と規定
第4回	10月26日	カテゴリーの探索と規定
第5回	11月2日	第1回発表「新商品機会（ターゲット、カテゴリー）」
第6回	11月9日	アイデアの創出（⇒販売店店頭調査実施）
第7回	11月16日	アイデアの創出
第8回	11月30日	競合分析
第9回	12月7日	第2回発表「競合分析と商品案のベネフィット」
第10回	12月14日	アイデア・スクリーニング（⇒コンジョイント分析調査実施）
第11回	12月21日	飲料の事例研究
第12回	1月6日	コンセプト開発
第13回	1月18日	第3回発表「コンセプト案」（⇒消費者受容性調査実施）
第14回	1月25日	コンセプト案精緻化
第15回	2月1日	第4回発表「最終商品案」

(4) 研究開発論

本授業の目的

本授業の目的は、学生に研究開発者としてのキャリア形成を考える機会を与えることである。大学院に進み、大学の研究者あるいは企業の研究開発職に進むキャリアを考えている理工学部2年次以上を主な対象に、これから関わっていく大学における研究と、その後に関わる可能性のある企業での研究開発について、その共通部分や差異を知り、歴史的経緯や現状を認識して、これからの研鑽に役立ててもらうことを主な目的としている。

授業の内容

講義の前半では、研究開発とはどのようなものか、大学と企業の研究は、どのような点で共通であり、どのような違いがあるのか、また研究成果から生まれるイノベーションはどのようなものか、いくつかの事例を交えて様々な角度から解説していった。講義の後半は、将来、ビジョンを持って自らテーマ設定ができるような研究者、技術者になるよう未来社会のビジョンについてのグループ討論を行った。また、最後は、「技術が支える30年後の未来社会」をテーマに各自の考えをまとめるレポートを課した。

本授業の構成

本講義の進め方は以下の通りである。

1. オリエンテーション（本講義の目的、概要、進め方）
2. イノベーションとは？何のために研究開発をするのか？
3. 研究開発とは？ 企業における研究開発事例
4. 企業における研究開発の歴史
5. 大学における研究（企業との違い）
6. 社会はテクノロジーの変化とどう向き合うか
7. 未来社会と研究開発
8. 研究開発に活用する特許（概要と重要性）
9. 研究開発に活用する特許（調査方法演習）
10. イノベーションと未来社会（1）導入
11. イノベーションと未来社会（2）討論
12. イノベーションと未来社会（3）発表
13. イノベーションと未来社会（4）グループ発表振り返り
14. レポート作成
15. まとめ（研究開発従事者の資質とキャリア形成）

受講学生は、理工学部22名（2年生18名、3年生2名、4年生2名）であった。

今年度の振り返り

今年は、コロナ禍の影響でオンライン開講とした。昨年的人数よりも人数は半減したが、リアルタイムでのオンライン講義でグループ学習やグループ毎の発表、討論をおこなう上では、ハンドリングしやすい人数であった。

オンライン学習については、なるべく一方通行にならないように、常に学生に問いかけて「手を挙げる」などの反応を求めたり、Zoomの投票機能を用いて参加させたり、双方向となるよう工夫した。また、Zoomのブレイクアウトルーム機能を用いて、4人1グループでグループ討論をおこなった。このグループ討論を通じて学生からは、学生からは、以下のような反応を得た（抜粋）。

- ・実体験を用いての説明が良かった。
- ・学生同士で将来の展望などを話す機会が多く、身近な人たちが何を考えているのか知れて良かった。
- ・オンライン授業であったが、zoomのいろいろな機能を使ってよかった。
- ・我々からアンケートを取って要望に応じてくれるのが良かった。
- ・普段は専攻分野の勉強が多いが、その学問について俯瞰的に見るきっかけになったと思う。
- ・生徒同士のコミュニケーションが多い。
- ・自分で考えること。グループワークで発表し、他人との違いを共有すること。
- ・研究開発について考え学ぶきっかけになったのがよかった。また周りの人の話を聞くことが刺激になり、もっと頑張らないと、と思うようにもなったので意見交換や討論の場は設けるべきである授業であると思った。
- ・研究分野のことを専門的にずっと掘り下げるのではなく研究職というものに対する各分野から学べた点がよかった。
- ・実際の経験を踏まえて話していただいたことがよかった。ディスカッションも他の授業と違って同じEPだったり学科だったり学問分野に近い人と話せるのでディスカッションがしやすかった。同じEPでも興味あることや考える方が異なるので新たな発想をもらうことができよかった。
- ・大学、高専、企業など様々な研究者のキャリアを学べたところ。
- ・録画配信がなかったため、授業に集中できた。毎回の授業が楽しかった。30年後の社会を考えるとというレポート課題のテーマが非常に面白かった。いろいろなことを考え、調べ、大変勉強になった。
- ・ディスカッションを4人程度で行ったこと。発言しやすい雰囲気づくりをしてくださったこと。
- ・為近先生や外部講師の方の研究分野の話は純粋に興味湧いて面白かったです。経歴の話も自分の将来について考える参考になったので、これらは今後もこの授業を履修する学生のためになると思いました。

進路調査結果

また、講義の最後に進路に関する意識調査をおこなったので、一部をここに記す。

※回答数 20名

問1) 現時点で、将来についての考えを聞きます。

大学院修士課程に進学後、修士で就職	12
大学院修士課程に進学、その後は未定	4
大学院修士、博士（後期）まで進学	2
学部卒業で就職	2

問2) 将来の希望について

大学などアカデミアの研究者	4
企業の研究者	8
企業で、研究よりも技術開発を希望	7
企業で技術系以外（営業、経営企画など）	4
専門分野の知識を生かして起業	1
分野にこだわらずとにかく自分で起業する	2
教職（大学含まず）	2
まだわからない（模索中）	4
その他（問6で具体的に）	1

問3) 上記2問（進学や進路）に対する考えが、講義の前と後で変わった場合は、その具体的な内容を記述して下さい。

- ・博士号という新たな選択肢に触れたが、自分がもし博士課程に進学して博士号を取れるかどうかといわれると難しいのではないかと思ってしまう。
- ・今までは就職についてどのような仕事をしたいかあまり考えていなかったが、講義をきいて技術開発を行っていきたいと思った。具体的な技術開発の内容は今後考えていきたい。
- ・具体的に進学や進路に関して考えていなかったが、今回の講義で新たな知識が得られ考え方は変わったと思う。
- ・講義の前と後で変わったが、講義が関連してたというよりは、自分で様々な知見を広げて（講義がきっかけのものもある。）、変化したという感じです。
- ・企業に対するイメージが明確になって、前より「企業に就職するのもいいな」と思えた。

以上

(5) アートマネジメント

2020 年度秋学期開講 履修者 154 名

学部	経済	経営	理工	教育	都市科学	合計
1 年	0	35	19	17	0	71
2 年	1	2	31	0	10	44
3 年	3	2	20	0	9	34
4 年	1	0	2	0	1	5
合計	5	40	72	17	20	154

本講義は全学教育科目として、芸術の運営、マネジメントに関心のある学生を対象に、実務家による講義を中心とした内容である。初回と最終回は、永澤桂による美術史の観点から、芸術とパトロンの歴史、現代芸術の需要と社会状況についての講義となった。2 回目から 14 回目の各回は、それぞれ専門家による現代の芸術の生成とあり方、運営について、また未来の想像図を含めた深い知識、経験と考察による講義であった。次年度は、さらにビジネス、社会とのつながりの観点に焦点を当てた講義づくりを目指したい。

【2020 年度講義実績】

回	テーマ	講師
1	オリエンテーション／芸術におけるパトロンの歴史	永澤 桂
2	Arts と生きる—Arts は人に何をもちたらし得るか、何をもちたらし得るか。	西巻正史 トッパンホール プログラミング・ディレクター
3	オペラ歌手を経営する～演奏家の視点による社会との交流	藤木大地 カウンターテナー歌手
4	俳優による演劇ビジネス／俳優自身が企画・運営・資金集めをして公演する	五大 路子 俳優・横浜夢座座長
5	都市開発と芸術文化～街づくりの実践を通して～	恵良 隆二 横浜市芸術文化振興財団専務理事
6	地域社会を芸術でうごかす	田島悠史 芸術経営者・芸術祭プロデューサー
7	美術館における教育／美術館と来館者をつなぐ取り組みを考える	藤田 百合 女子美術大学助教、学芸員

8	音楽業界の現状と発展／クリエイターからのマネジメントの必要性	渡辺俊幸 作曲家・洗足学園音楽大学客員教授
9	現代音楽からアニメソングまで プロジェクト誕生 秘話「コンサートの企画に新風を吹き込んで、新しい文化を創ることに挑戦する活動」	松尾祐孝 音楽プロデューサー・洗足学園音楽大学教授
10	芸術はマネジメントできるのか？①	梅津庸一 美術家
11	学芸員の仕事 美術史の既成概念を破れ！	黒田 泰三 明治神宮ミュージアム館長
12	オーケストラ運営の環境と戦略	別府一樹 日本フィルハーモニー交響楽団
13	芸術はマネジメントできるのか？②	梅津庸一 美術家
14	音楽業界の構造変化	前野 知常 洗足学園音楽大学教授
15	総括	永澤 桂

(6) 海と地域のつながりと活性化

2020年度秋学期から、全学年を対象とする全学教養教育科目として「海と地域のつながりと活性化」を開講した。現代社会において食糧、資源、運輸など生活・ビジネスにとって「海」は当然ながら極めて重要であり、昨今海洋プラスチック問題など環境面でも大きな課題が認識されてきているものの、その現状と課題の本質や利用・管理についての理解は浸透していない。また、SDGsを踏まえた持続可能な社会を考えるにあたり、「海」の課題は取り巻く地域全体とのつながりで捉えることが必須である。

本講義では海に関する全般的な知識と社会とのつながり・環境問題の理解を出発点に、丹沢の山々から相模湾まで多様な地勢を持ち、観光地でありかつ高齢化・過疎化している、海とのつながりの強い小田原を中心とした神奈川県西部エリアの実態と現地事業者・プレーヤーによる取組み、その他国内外の事例などを学ぶ。その上で県西エリアの海と地域の特色を生かしたブランドづくりや商品アイデアなど、地域活性化の取組みをグループワークによって立案することによって、グローバル／地域の海・環境問題／持続可能な社会を考える視座とアプローチの習得を実践的に進めるものとした。

本来は対面で実施することが望ましいが、今年度はZoomを用いたリアルタイムのオンライン方式の授業とした。履修学生は12名と少なかったが、最後までほぼ全員が無遅刻無欠席で、大変意欲的に授業に参加する様子が見られた。最終的に2チームがまとめたアクションプランは“小田原体験ツアー”と“海と山から学ぶ体験型インターン ODAWARAの「わ」”という、学生らしい視点の生かされた興味深いものである。また最終日のアクションプラン発表会には、小田原市役所の企画政策担当や小田原地域のプレーヤーも参加し、有意義な意見交換を行うことができた。

今後は、この授業を核として、県西エリアでの活動をさらに充実させていきたい。

「海と地域のつながりと活性化」

■全学教養教育科目／全学年対象／2単位／水曜日3限

■英文名 Linkage and Revitalization of the sea and its regional society

■担当教員：林田昌也、水井涼太、船場ひさお

■授業内容：

- ・オリエンテーション／これまでの県西エリアでの活動 ・SDGsの理解
- ・海と人類の海洋利用と課題 ・地球規模の海洋の姿・海洋を取り巻く世界情勢・環境問題
- ・日本の海、かながわの海 ・海の自然と社会、日本における海の利用と問題点
- ・海の生態系と環境 ・神奈川県西の海の環境、生態系とその変化
- ・小田原の市民活動と若者の活躍（ノンブランド小田原）
- ・小田原の未来（守屋輝彦小田原市長）
- ・小田原を中心とした地域活性化活動（矢郷史郎様）
- ・小田原の漁業の現状・課題と取組み（鈴木大助様）
- ・海を活かした国内外の地域振興事例・震災復興・三陸の海の取組みなど地域振興事例（遠野）
- ・講義内容を踏まえたチーム・ディスカッション
- ・海と地域のつながりと活性化に向けたアクション・プラン ・アクション・プラン発表

2. 大学院博士課程前期学生へのベンチャー教育（副専攻プログラム）

本副専攻プログラムは、大学院生を対象としたもので、下記の3科目6～8単位で構成される。

「イノベーションと課題発見Ⅰ、Ⅱ（各2単位、計4単位）」、「都市イノベーションと課題発見Ⅰ、Ⅱ」は、ベンチャーマインドを持った起業家型人材育成を目指したアントレプレナー教育の一環として、主に理系大学院生を対象に開講している。学内外の起業関連エキスパートを講師として座学を行うと共に、「ベンチャー企業訪問調査」やそれをまとめて発表するグループワーク（Ⅰ）と「ビジネスプラン策定」（Ⅱ）を課し、コミュニケーション力、広い視野からの問題解決力、プレゼンテーション力の向上を図っている。

また、「イノベーションと課題発見Ⅲ」、「イノベーションと起業Ⅱ」（2単位）、「都市イノベーションと起業Ⅱ」（4単位）（ベンチャーインターンシップ）は、インターンシップ科目として、ベンチャーあるいは、中小企業の実態に触れると共に、企業が実際に抱える課題の解決方法を実習する機会を提供している。上記の3科目の履修者には、副専攻プログラム「ベンチャービジネス」の修了証を発行している。

（1）イノベーションと課題発見Ⅰ

【講義スケジュール】 秋学期第1ターム 月曜 4,5限

No.	4限 (14:40~16:10)	No.	5限 (16:15~17:45)
1	オリエンテーション/イノベーションと課題発見 ／ベンチャーインターンシップ	2	課題解決からの起業 講師①：一之瀬 卓 (株)ipoca 代表取締役社長)
3	研究者からの起業～夢の実現のために～ 講師②：増田 建一 (動物アレルギー検査(株) 代表取締役社長)	4	社会環境の変化とイノベーション 講師③：牛島 慶一 (アーンスト・アンド・ヤング ジャパンエリア CcASS リーダー)
5	社会課題と起業（ソーシャルベンチャーとは） 講師④：水井 涼太 (NPO 法人 ディスカバーブルー 代表理事)	6	起業家訪問調査について
7	今、産業界に必要とされること 講師⑤：堂免 恵 (株)悠志創造 代表取締役社長)	8	グループワーク ～ 起業家インタビュー ～
9	百年企業の挑戦 VUCA ワールドに挑むマーケティングと R&D 戦略 講師⑥：阿部 剛士 (横河電機(株) 常務執行役員)	10	次世代のモビリティイノベーション 講師⑦：上村 実 MONET Technology(株) 事業推進部部長
11	技術と経営 ～ロボット×農業で起こすイノベーション～ 講師⑧：菱木豊 inaho(株) CEO	12	起業家インタビュー相談会
13	グループワーク ～ 調査内容のまとめ ～	14	グループワーク ～ 調査内容のまとめ・発表準備 ～
15	起業家訪問調査の発表		

今年度は、コロナ禍の影響で、秋学期に移して双方向 Zoom により、リアルタイムオンラインで開講した。開講時期、時限を変更したためか、履修学生数は 7 名と例年（20～30 名程度）より少ない受講者となった。（内訳：教育学研究科 1 名、理工学府 1 名、都市イノベーション学府 5 名）

本講義は、主に理工系の大学院生向けに、自分の研究テーマをベースにビジネスを考えられるようなベンチャーマインドを持った起業家型人材育成のためのものである。ベンチャー起業や企業経営に関して民間の第一線で活躍しているエキスパート人材、社会環境を的確に捉えて、イノベーションを起こそうとしているような人材等に講義（講演）をお願いし、講義や討論から学ぶ座学パートと、自ら考えて行動する力を培うためのグループワークによる実習パートに分かれる。座学パートでは、講義を聞いた後に講師を交えた討論や自分なりのまとめを行い、講師へフィードバックする。グループワークの実習パートでは、実社会で課題解決に挑む起業家にヒアリング調査を実施し、内容を発表する。

グループワークでは、3 人と 4 人の 2 チームに分かれて、起業家調査を実施した。例年は、起業家訪問調査においては、実際に企業を訪問してインタビューするが、今年度はオンラインでのヒアリング調査となった。まず、チーム内でディスカッションを重ね、各人が興味のあるベンチャー企業を選び出し、その中からヒアリングする企業を決定し、メールや電話などでアポイントメントを取り、Zoom などを用いたオンラインでリモートインタビューを試みた。しかしながら、コロナ禍でベンチャー企業の経営者は例年よりも状況が厳しいこともあったためか、断られるケースが多く、一方のチームは、何度もディスカッションを重ね、新たな候補を見つけて取材依頼をしたが、最終的に、ヒアリングの実施には至らなかった。もう一方のチームは、実験機器・設備および技術のシェアリング・プラットフォーム（株）Co-LABO MAKER にヒアリングを行うことができた。どちらのチームも、例年以上に時間をかけて取り組み、議論を深め、アポ取りやディスカッション、まとめを通じて自ら考え、学び行動する力をつけることが出来た。

今年度は、人数が少なかったこともあり、学生からの積極的な働きかけがあった。外部講師として招いた堂免恵氏と阿部剛士氏については、学生からもっと話が聞きたいという強い要望があり、堂免氏とは、講義最終回（第 15 回）の後で任意参加の討論会を実施し、阿部氏には、シリーズの続きとなる「イノベーションと課題発見Ⅱ」の講義で再度登壇して頂いた。

全体を通じて、学生からの評価は非常に高く、複数の学生から「他の学生も皆この講義を履修すべき」という意見が聞かれた。

(2) イノベーションと課題発見Ⅱ

【講義スケジュール】 秋学期第2ターム 火曜 4,5 限

No.	4 限 (14:40~16:10)	No.	5 限 (16:15~17:45)
1	【オリエンテーション】 授業の進め方&特別授業：起業家取材&座談会	2	【オリエンテーションの続き】 他者に自らの専門性を伝える
3	【レクチャー】顧客への価値提供 講師：湯沢 雅人氏 (成長戦略教育研究センター リサーチャー)	4	【演習】専門分野の可能性 自らの専門分野で、研究成果を活かして 事業化された事例
5	【レクチャー】研究成果の事業化 講師：小倉 里江子氏 (横浜パティカ/ロジ-株式会社 テクニカルター)	6	【個人ワーク】 研究シーズのビジネス化
7	【個人ワーク】 ビジネスプランを考える	8	【グループワーク・討論】 ビジネスプラン発表と議論
9	【個人ワーク】 ビジネスプランブラッシュアップ	10	【レクチャー】百年企業の挑戦 第2回 講師：阿部 剛士氏 (横河電機株 常務執行役員)
11	【レクチャー】事業化とは 講師：呉 雅俊 (株式会社 TNP パートナーズ代表取締役社長)	12	【全体討論】 事業化プラン発表とブラッシュアップ
13	【個人ワーク】 事業化プラン再構築	14	【個人ワーク】 発表準備
15	【発表】ビジネスプラン改善点の発表		

本年度の受講学生は、教育学研究科1名、理工学府1名、都市イノベーション学府4名の計6名であった。

本講義は、この前段となる「イノベーションと課題発見Ⅰ」で学んだベンチャー企業への理解をふまえて、自らの専門分野におけるシーズをもととしたビジネスプラン作りを行う。作成したビジネスプランについて、他の受講生や教員、ベンチャー育成の専門家とディスカッションをおこなうことにより、他分野からの視点、知見をプランに組み込んで、プランのブラッシュアップを図る。最終的に、より現実的で実現可能な事業化プランになるよう進めていく。

今年度は、一人ずつ自分の研究分野に関連したビジネスプランを作成した。当初なかなか絞りきれない学生がいたが、発表と討論を繰り返すことで、テーマを絞り込み、最終的には、ほとんどの学生が実際に起業してもよいと思えるようなレベルに到達した。各学生のビジネスプランは、以下の通り。

- ・学校の働き方改革をサポートする「部活動コーチ派遣」 一生徒の主体性を育む新しいカタチ
- ・データ主体の3Dプリンター出力サービス
- ・建築関係者向けのVRモデル作成アプリケーション
- ・シェアミチ ー減築×ラストワンマイルモビリティで都市を活性化ー
- ・礼拝の場をコンバージョンする「寺院再生請負事業」

・ブルーカーボン生態系を利用した CO2 吸収量評価の事業化 —2050 年の炭素排出量ゼロに向けて—

※「イノベーションと課題発見Ⅲ」、「イノベーションと起業Ⅱ」（ベンチャーインターンシップについては、今年度は、コロナ禍で対面のインターンシップが出来なかったため、履修希望者は1名いたが、オンラインでのインターンシップを受け入れてもらえる企業とのマッチングが成立せず、最終的に履修には至らなかった。

(3) 神奈川県を取り組む技術課題

本講義は、神奈川県（自治体）と連携して、県が取り組む研究課題を理系学生にわかりやすく解説するものである。これにより、首都に隣接して研究開発機関などの多い神奈川県の特徴ある産業や技術に関する理解を深めるとともに、自身の専門分野と社会とのつながりを意識させ、学生自らが卒業後の進路について考える時に役立てることを目的としている。

特に自分が学ぶ神奈川県という地域には、どのような技術的な課題があり、どのようなアプローチでこれを解決するための研究を行っているのかを知ること、何故、その研究が必要なのかを意識して、自分自身の研究テーマについても、その社会的意義や位置づけを考える力を身につけさせる。実社会に役立つ研究とはどのようなものかを知ること、自身の大学院での研究テーマがどのようにしたら社会に還元できるのかを考えて、自らの研究テーマを俯瞰する力を身につけるよう指導している。

毎回の講義では、必ず感想レポートを書かせ、講義内容を自分の頭で反復整理し、研究課題がどのように役立つのか、自分の研究分野との接点はないかなどを考えさせるようにした。この形式は、これまでも行ってきたが、講師の方にもフィードバックしている。また、最終的に県の課題に対する提案のレポートを課した。単なる提案にとどまらず、理系の研究者として研究計画の立案になるよう指導した。

例年は、10回の講義と5コマ分を2回にまとめた形で各機関への現地訪問実習を行っているが、今年度は、講義もリアルタイム Zoom によるオンライン開講とし、実習も全てオンライン実習とした。現地訪問では、移動にも時間がかかるため、4カ所のうちから2カ所（各2.5コマ分）を選択して実習に参加するが、今年度は、オンラインということで、一カ所の実習は、1コマ分とし、5回のオンライン実習に全員が参加する形とした。実習と言ってもオンラインという制限があるため、実際に学生が手を動かして参加する形は難しかったが、それぞれ次のような形で、通常の講義とは異なる授業を提供した。

- ・ 神奈川県立産業技術総合研究所

施設の Web ページなどを見せながらの解説や、実際の実験室での様子を録画したものを視聴し、本来現地でしか見られないものを見せて頂く工夫をして頂いた。また、溝の口支所の展示室をストリートビューのように実際に学生各々が自分で移動するバーチャル見学をおこなった。

- ・ 水産技術センター、畜産技術センター

担当教員がタブレットを持って現地を訪れ、実際に学生が見学しているような形で、現場の研究者から説明をしてもらい、その様子を録画し、合わせて景色や設備なども撮影して、臨場感を出すように工夫した。実際の体験ではないが、施設の見学には近い形で、通常見られない場所などにも案内して頂き、撮影させて頂いた。講義日は、そのビデオを見ながら、県の職員の方に所々補足説明をいただいた。

・自然環境保全センター

この施設は、今年度は講義がなく実習のみだったので、まずはセンター業務の説明をして頂いた。その後、多少なりとも実習要素を採り入れたいということで、ここで研究している「無花粉杉」について、あらかじめ、学生の自宅や研究室など聴講場所に杉の種子サンプルを配布し、当日は、種子サンプルをつぶして、ルーペなどで観察し、有花粉の種子と無花粉の種子を判別する実習をおこなった。

講義後のアンケートでは、オンライン授業については、ポジティブな意見が多かったが、実習だけは、実際に現地でやって欲しかったという意見が多く見られた。

【講義スケジュール】 秋学期 水曜 3 限

No.	日程	内容	担当
1	10/7 (水)	オリエンテーション 神奈川県科学技術総合政策	総合政策課/ 成長戦略教育研究センター
2	10/14 (水)	産業技術総合研究所の取り組む技術課題	産業技術総合研究所(KISTEC)
3	10/21 (水)	水産技術センターの取り組む技術課題	水産技術センター
4	10/28 (水)	環境科学センターの取り組む技術課題	環境科学センター
5	11/4 (水)	農業技術センターの取り組む技術課題 1	農業技術センター
6	11/18 (水)	農業技術センターの取り組む技術課題 2	農業技術センター
7	11/25 (水)	畜産技術センターの取り組む技術課題	畜産技術センター
8	12/2 (水)	温泉地学研究所の取り組む技術課題	温泉地学研究所
9	12/9 (水)	衛生研究所の取り組む技術課題	衛生研究所
10	12/16 (水)	オンライン実習 1 : 産業技術総合研究所(本所)	KISTEC 本所
11	12/23 (水)	オンライン実習 2 : 産業技術総合研究所(溝ノ口支所)	KISTEC 溝ノ口支所
12	1/13 (水)	オンライン実習 3 : 水産技術センター	水産技術センター
13	1/20 (水)	講義総括	成長戦略教育研究センター ／総合政策課
14	1/27 (水)	オンライン実習 4 : 畜産技術センター	畜産技術センター
15	2/10 (水)	オンライン実習 5 : 自然環境保全センター	自然環境保全センター

※例年の実習は4つの研究所のうち2箇所を選択し訪問するが、今回は4箇所(5回)全てバーチャル体験できるオンライン実習とした。

履修者：理工学府 修士課程生 13 名

3. 学内連携による企業成長戦略教育

(1) 実践企業成長戦略Ⅰ（国際社会科学府経営学専攻）

国際社会科学府経営学専攻と共同で、企業・機関の事例研究を行う科目として開講、本年度は17名の学生（うち14名が中国からの留学生）が受講した。昨年までは春学期開講であったが、コロナ禍の影響によりオンライン（リアルタイム）で秋学期の開講とした。

本科目は企業・経済活動のダイナミズムを研究対象とし、毎年テーマを設定してその具体的な事例を起業・機関の第一線の方の講義いただいている。本年度は「ダイバーシティ経営」をテーマに、さまざまな側面がある「多様な人材」を活かし、その能力を最大化して価値の創造をはかるとともに個人の幸福と充実につなげる経営戦略について、下記の企業よりお話をいただいた。

			テーマ	講師		
1		7日	オリエンテーション			
2	10月	14日	多様な人材の活躍支援 ～大成建設における取組み	大成建設株式会社	人事部部長	塩入徹弥氏
3		21日	従業員1,000名の企業が行うダイバーシティ推進の現状	株式会社アイネット	経営企画本部 ダイバーシティ推進室長	中島英子氏
4		28日	日本の労働市場とダイバーシティの現状	キーンバウムジャパン K.J.コンサルティング株式会社	代表取締役社長	鈴木悦司氏
5		4日	ダイバーシティ推進の取組み ～JFEエンジニアリングの事例～	JFEエンジニアリング株式会社	人事部 グローバル人事推進室長 兼ダイバーシティ推進室長	中津留純子氏
6	11月	11日	チャンスとチャレンジ ～日本で働いている外国人からの視野	光輝化成株式会社	取締役品質保証部長	チャン レトゥ ウェン氏
7		18日	経営戦略としてのダイバーシティ&インクルージョン	帝人株式会社	人財部 ダイバーシティ推進室長	原美奈子氏
8		25日	地方×中小企業における ジェンダーダイバーシティ推進の課題とチャレンジ	株式会社Will Lab(ウィルラボ)	代表取締役	小安美和氏
9		2日	富士フイルムにおける障がい者の活躍推進	富士フイルム株式会社	R&D統括本部 事務部長	岩田克己氏
10	12月	9日	教育改革とダイバーシティ ～大学をもっと多様化させよう	株式会社進研アド	Between編集長	中村浩二氏
11		16日	座談会	株式会社テレビ神奈川	常勤監査役	東幾世氏
12		23日	起業という選択 ～ゼロから進める2足の草鞋～	株式会社VM	代表取締役社長	渡辺順子氏
13		13日	国籍の違う仲間と築くチームワーク	株式会社ファンケル	海外営業部 部長	谷川篤志氏
14	1月	20日	多国籍・多拠点スタートアップによる グローバル展開のチャレンジ	Peatix Japan 株式会社	取締役CMO	藤田祐司氏
15		27日	まとめ			

Ⅱ. ドクターキャリア開発施策

ドクターキャリア開発施策として、博士の学位を取得したドクター人材が、アカデミアだけにとどまるのではなく、ベンチャー企業を含む民間企業など幅広く社会で活躍できるよう、人材育成と多様なキャリアパスの提示を目指したキャリア支援事業を行っている。本事業は、2012年度より4年半に渡り、文部科学省の補助金（JST委託）を受け『ポストドクター・キャリア開発事業』として実施してきた。ポストドク研究員に企業に目を向ける機会を与える長期インターンシップや、グローバルキャリア開発研修、社会に出て通用する様々な研修としてリーダー養成講座などを行ってきたが、補助金の終了した2017年度以降は、自立型後継事業として、主な対象をポストドクから博士課程の学生にシフトし、それに合わせて、事業内容も見直しを図って、効率的に行ってきた。

このような活動は、全国の大学で様々な形で実施しており、いくつかの大学が、コンソーシアムとして協力体制を取っている。本学も北大を中心とする「連携型博士研究人材総合育成システム」に参画し、年に数回の専門委員会で意見交換し、お互いのイベントに学生の参加枠を設けて相互乗り入れをしている。「連携型博士研究人材総合育成システム」の参加大学は、北大、東北大、名古屋大、お茶の水女子大、横浜国大、立命館大、兵庫県立大、阪大、OIST、神戸大、筑波大、新潟大の12大学である。

この事業の一環として、2015年度より博士人材と企業とのマッチングイベント「キャリアパスフォーラム」を、2016年度より博士側からの情報発信に重点を置いた「博士のシーズ発表会」を実施している。また、これらのイベントをより広く学生に知らせ、有意義なものにするため、様々な施策を行ってきた。今年度は、コロナ禍の影響で、例年通りとは行かなかったが、学内イベントとしては、博士のシーズ発表会を中止した一方で、オンラインによるメリットを活かして、より小規模な交流会や業界研究セミナーなどこれまでとは異なる施策も実施した。具体的に実施した活動は、以下の通りである。

・**Dキャリア情報版**：登録者に対して、博士課程生向けのインターンシップや企業情報、イベント情報などを不定期にメールで配信。今年度は47報および号外3報を発行。

・**ドクターキャリア相談室**：主に博士課程生の就職相談や、博士進学に迷う修士課程生などの相談に乗る相談室を毎週水曜日の2・3限に開設した。実際には、事前にメールで予約を取り、相談者の都合に合わせて、面談をオンラインにて実施。面談は、企業の研究開発部門での経験のある実務家教員として、ドクターキャリア開発部門の教員が基本的に2名で対応する。今年度は、通算7件の相談があった。

・**オンライン交流会**：今年度初の試みとして、博士課程生間の交流促進や意見交換の場を提供するオンライン交流会を2回開催した。特に第2回（6月25日開催）は、『就職内定

者に聞く』と題して内定者2名に体験談を語ってもらい、参加者8名と活発な意見交換の場とすることができた。

・外部団体との連携イベントの実施：

- ① 『若手技術者が経験を語る2020』2021年1月29日（金）開催（SEAJ（一社）日本半導体製造装置協会共催）
- ② 『コンサルティング業界セミナー』2021年3月25日（木）開催（PwCコンサルティング合同会社協力）

また今年度の『キャリアパスフォーラム』については、以下の通りオンラインにて開催した。

■ 2020年度<オンライン>キャリアパスフォーラム

日時：2020年11月14日（土）13：00～17：00

方法：Zoomによるオンライン開催

対象：博士課程後期在籍者、ポストドクター

狙い：参加企業への自己アピール、進路に対する視野を広げる（学生）

研究機関が求める人材の把握、ネットワーキング・関係づくり（企業）

内容：【事前】

- ・企業紹介動画視聴（学生）
- ・学生プレゼン資料閲覧（企業）

【当日】

- ・博士のプレゼンセッション（学生毎Zoomブレイクアウトルーム活用）
（設定面談：5分×12回、自由面談：20分×1回）
- ・個別相談会（会社毎Zoomブレイクアウトルーム活用）
（設定面談：10分×7回、自由面談：20分×1回）

参加企業（15社、五十音順）：

荏原製作所、京セラ、コニカミノルタ、サンディスク、島津製作所、住友化学、住友金属鉱山、テクノスデータサイエンス・エンジニアリング、テルモ、都立産業技術研究センター、東芝、とめ研究所、ニッタ・デュポン、日本入試センター、マイクロンメモリジャパン

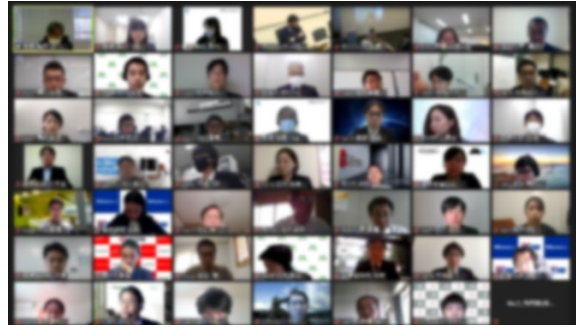
参加者数：

博士課程後期生 30名（内、本学12名）

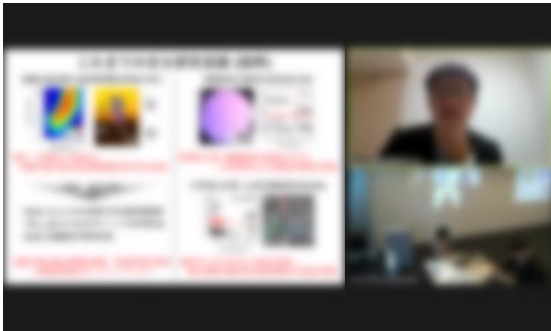
企業 28名



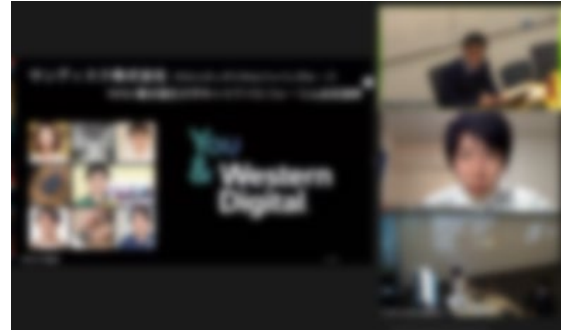
梅原機構長による開会のご挨拶



メインルームでの参加者の様子



学生のプレゼンセッションの様子



企業の個別相談会の様子

通算7回目となる本イベントであるが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインでの開催となった。このため、ポスターを使用した対面による研究内容説明や自己アピールが、パワーポイントファイルによるリモート説明に切り替わるなど、やや臨場感の欠ける側面はあったものの、「コロナ禍で企業訪問や合同会社説明会などが制限される中、貴重な機会でした」「学生の入れ替えが短時間で行え、リアル開催よりも効率よく話しができた」など、プラス面のコメントが数多く寄せられた。

毎年学内外を問わず、本イベントをきっかけとした就職内定報告の数も増えてきているが、一方で本学学生の参加比率が低いことは反省すべき点であり、今後は一層学内での認知度を上げ、本学学生の参加を促すよう努めていきたい。

Ⅲ. その他の外部連携活動

1. シュタインバイス大学日本研修

シュタインバイス大学日本研修2020秋 参加報告書

横浜国立大学

シュタインバイス大学日本研修参加者 4名

(理工学府 M1, M2、環境情報学府 M1, M2)

2020. 12. 29

1. 参加者

ドイツ人学生 40名、日本人学生 20名(東京農工大学 10名、横浜国立大学 4名、他 6名)、社会人 3名

2. 全体概要

この研修は事前研修、本研修、研修後反省会の3部構成でオンラインで行われた。事前研修では経営戦略に関する基礎知識を学んだ。本研修ではその知識を活かし、ドイツ人達とオンラインで協力をして企業の課題解決をするための案を発表した。研修後反省会では、プログラムを通しての成果や反省を話し合った。事前研修や本研修は基本的に英語で行われ、研修後反省会は日本語で行われた。以下に全体のスケジュールを示す。

研修全体のスケジュール概要

日時	行事	場所	内容
2020/9/18	キックオフミーティング	オンライン (Zoom)	全体の概要説明 チーム分け
9/26, 10/3, 10/24	事前研修	オンライン (Zoom)	企業のビジネス・経営戦略に関する講習、グループワーク、専門家インタビューの内容整理、事前研修の成果発表
10/21 (チームごとに異なる)	専門家インタビュー	オンライン (Zoom)	企業課題アプローチに対する専門家からの助言
11/2-11/13	本研修	オンライン (Zoom)	異文化に関する講習、ドイツ人学生とチームを組みケーススタディ・グループワーク、成果発表
12/15	研修後反省会	オンライン (Zoom)	研修成果や反省点の共有

3. 事前研修

事前研修は3回行われ、それぞれ4時間程度であった。学んだ内容を以下にまとめる。

- 企業のビジネス・経営戦略に関する講習

「ビジネス戦略立案」全体の流れ・個別分析手法・ツール(SWOT, PESTLE, 5 Forces等)を学び、それらを実際に用いた事例について講習を受けた。

- グループワーク

講義内容の理解のために行われた。講習で学んだ分析手法を用いて、実際の事例に対する経営戦略を考え、発表した。

- 専門家インタビュー

参加者は3チーム(Lion, SET, Westermann)に分かれ、それぞれの企業課題に対し助言できる専門家へインタビューを行った。

- 事前研修の成果発表

講習内容や専門家インタビューをもとに、事前研修最終日時点での、自分達のチーム課題に対する経営分析 / 提案等を発表した。

4. 本研修

本研修のスケジュールを以下に示す。

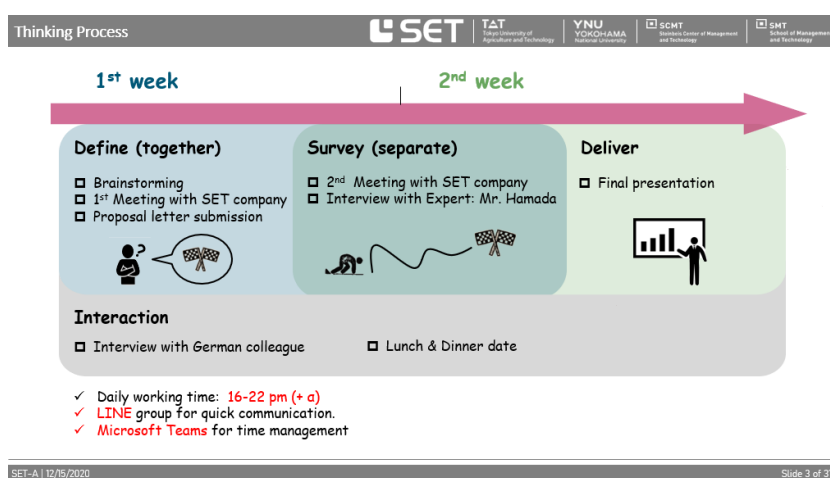
本研修のスケジュール

Date	AM	PM	Evening	
2 Mon	Online 16:00~19:00	Introduction and Seminar		
3 Tue		Group work: preparation for the case		
4 Wed		Session with case-providing company		
5 Thu		Group work		
6 Fri		Group work		
7 Sat		Group work		
8 Sun		Cultural event (TBD)		
9 Mon		Lecture		
10 Tue		Lecture		
11 Wed		Group work		
12 Thu		Group work		
13 Fri		16:00~20:30	Presentation and wrap-up	

本研修では、事前に分かれた Lion A/B, SET A/B, Westermann A/B で同じチームのドイツ人達とともに企業の課題解決に向けた提案を作成し、発表した。横浜国立大学からは岡島、馬場が SET A チーム、中村が Westermann A チーム、織田が Westermann B チームに参加した。

SET A(岡島・馬場)

半導体試験システムを提供する SET GmbH の日本進出に向けた、市場・パートナー企業の調査/ビジネス戦略の提案/日本のビジネス文化のガイドライン作成、を行った（タイムラインは以下図を参照）。



SET A チームのタイムライン

Westermann A(中村)

Westermann A チームは内装デザインや家具製造を行う Westermann GmbH の製品 (X-brick および flomo) の日本進出が課題だった。課題に対するアプローチとして①オフィス家具の日本市場進出ポテンシャルの検討、②販売網の構築方法 (直輸入/ライセンス生産/ベンチャー)、③最適な販売パートナーの選定を行った。

Westermann B(織田)

Westermann B チームは、A チームと同様にドイツの家具メーカーが作った新しいオフィス用品が日本市場に参入する余地があるか否かを、日本の現状から鑑みることをした。商品が日本に来るまでに大きく①どこで作るか②誰に売ってもらうか③どんな層に売れるかを軸として情報収集をおこなった。具体的には、オフィス用品会社に連絡してみたり、アンケートを取ってみたりなどの行動を行い、数字に元づいたデータを得るように心掛けた。

5. 研修後反省会

研修後反省会では、各チームでの本研修の進め方や成果、また研修を通して感じた個人・プログラム全体に対する改善点を発表し意見交換を行った。

6. 本研修の感想

(織田)

本研修に初めて参加した身としては、やったことのない分野に知らない人たちと取り組むことができるという期待が半分ある一方で、全くついていけなかったりしないだろうか、という不安も半分ありました。

・前研修

研修では日本チームだけで行う前研修が実際にドイツのグループと合同で行う本研修の前にありました。

私のようにマーケティングに関わったことのない学生にはこの前研修は「基礎」を学ぶ上では非常に役立ちました。マーケティングを考える上でPESTであったり、基礎基本となる知識でさえ私には全く知らないことばかりだったからです。

ただ、初のオンライン開催ということで仕方なかったとは思いますが、実際にマーケティングのシミュレーションを行った際、はっきりとした目標が各回であいまいだったためそこがはっきりすればなお目的をもって良いアウトプットができたと思います。

・本研修

本研修ではやはりドイツチームにリードされる展開となった。おそらく普段で用いている英語の数が違うせいもあるが、全く話についていけない子も1名チームにいたことになった。幸いにも参加した班員の英語力は高く、ほかのメンバーはかなり話す、理解することができたため、しっかりとついていけなかった子にも情報の共有ができたと思います。

次回以降これをオンラインで行うのであれば、ある程度班分けする際に英語力を確かめてから均等になるようにわかるほうが良いかもしれないと考えました。

(岡島)

本プログラムの参加にあたり、「Comfortable zone から抜け出して挑戦する」という目標を設定しました。これまでは自分に直接関係がないことは意識的に避けてきましたが、これでは自分の可能性が狭まる一方だ、と就職活動を通して痛感しました。そんな矢先、本プログラムの募集を見て、ビジネスという畑違いのプログラムだからこそ今の私にとって参加する価値があると感じ応募しました。

全プログラムを通して自分がチャレンジしたと思うことを列挙してみました。

- ・企業：全く馴染みがない半導体市場に挑戦
- ・チーム：リーダーに挑戦

- ・グループワーク：専門の人に直接アポ&お話を伺う(←東京農工大 工藤様)
- ・最終プレゼン：発表者に挑戦

活動を振り返ってみて、自分の意思で能動的にすべてのアクションを起こすことができましたと感じています。そして、その結果としてどんな環境でも力を発揮できるんだという自信が付きました。これはUncomfortable zoneでもがくことで、そこが新たなComfortable zoneとなり自分の守備範囲が広がったからだと思います。

成長があった一方で、まだ課題は山積みです。特に言語レベルの向上は急務で、同じ第二言語とは思えないくらいの差がありました。その現実を突きつけられ悔しいと思ったこの感情を大切に、これから努力したいと思います。

いずれにしても、このような挑戦・刺激の機会を与えてくださった本プログラムには感謝しかありません。ありがとうございました。



SET A チームメンバーと

(中村)

自分は理系大学院生として基礎研究に励む傍ら、研究目的にビジネス視点も持ちながら大学院生活を送りたいと思っていた。そこで修士1年の春学期に他学府のイノベーションに関する講義を取り、理系としてどのようにイノベーションを起こせるのか考えていた。今回のシュタインバイス大学研修は今まで学んだビジネス知識を実践できる良い機会だと思い参加させて頂いた。実際研修が始まると今まで学んできた分析手法などを使って経営分析する機会が多くあり、分析結果から戦略を考えていく過程は非常に楽しかった。今回学んで実践したスキルは、今後の社会人生活にも非常に役立つものだと思うので、もっと様々な経験をしてスキルを今よりも伸ばしていきたい。持っていたスキ

ルを活かしたという一方、全然上手く出来なかったこともある。それは英語での議論である。文字でのやりとりであれば翻訳ソフトも駆使することで意思疎通を何とか出来たが、声でのやりとりは普段経験する機会が少ないので、聞き取って自分の言葉で話すということがあまり出来なかった。英語でのやりとりを避けていく事は今後の人生において可能性を狭めてしまうので、スムーズな会話出来るように英語力向上に励みたい。全体を通してこのシュタインバイス大学研修ではうまく出来た面でもうまく出来なかった面でも密度の濃い経験をする事が出来た。このような貴重な経験をさせて頂き非常に幸甚である。

(馬場)

この研修に参加する前は、私は長期間英語を使って外国の人と話す機会がありませんでした。そのため、事前研修を受けている時から自分の英語力の総合的な低さを身に染みて感じていました。いざ本研修が始まってからは、ドイツの学生の英語力の高さに驚くとともに不安を抱えながら最初は取り組んでいました。しかし、ドイツ側の学生がフレンドリーに接してくれて居やすい雰囲気を作ってくれたり、low context だからか、話がまとまってきたらみんなに改めて決定事項を言葉にしてくれたりしました。また、同じ日本側のチームメイトが内容を共有したり分からなかったところのサポートをしてくれたりしたことも、この研修に取り組むにあたって私にとってとても励みになりました。

私は話し合いで発言をあまりできなかったもので、話に耳だけでもしっかりついていくことと、割り振られたタスクに対してはしっかりと取り組むことを意識しました。また、土日に行ったドイツ側のペアの人とLINEでは積極的に話しかけました。タスクでは、市場規模についてと日本にいる半導体商社の企業候補の情報について調査しまとめました。スライド作成の際は、ドイツ学生が外枠を作製してくれて、私のスライドも視覚的に見やすい形にアレンジしてくれていい発表へつなげてくれました。

今回の経験で私の印象に残ったのは high context と low context についてでした。ドイツ学生とコミュニケーションを取るために low context を意識した方がいいということはもちろん、日本人同士であっても議論に必要な low context の技術もあると思います。今後は、この話し方を日頃から意識し、また英語を用いて外国の人と関わる機会に挑戦したいと思います。

7. 謝辞

最後に、このような貴重な活動に参加させて下さった為近恵美教授をはじめ、ご支援いただいた方々に厚く感謝を申し上げます。

YNU 横浜国立大学

地域連携推進機構
成長戦略教育研究センター